

学習者の主体性を高める教育実践とは？

NPO 法人言語文化教育研究所における教育実践を通して

武一美*・狩野倫子*・古賀和恵*・村上まさみ*・＜共同研究者＞谷岡ケイ**

1. 学習者の主体性を高める教育実践とは？

- ことばの学習の主体は教師ではなく、あくまでも学習者である。
- 学習者の「考えていること」の表現化が教室活動の目標となるべきである。
- 具体的な意味のあるコミュニケーションの場の創造。
- 担当者の課題は、具体的な意味のあるコミュニケーションとは何か、またそうした場をどのように学習者に提供するのか、その実践を通して学習者の日本語の表現力はどのように育成されていくのかを常に考え実践することである。
- 早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化教育研究室での研究と実践を踏まえ、NPO 法人言語文化教育研究所（以下 NPO 法人 GBKI）を設立。

2. 教育実践

2-1 四季の講演会とワークショップ

- 当 NPO 代表の細川英雄を話題提供者として、3 ヶ月に一度開催。
- ワークショップ型の講演会。
- 目的：日本語教育と国語教育に関心を持つ全ての人に開かれた議論の場を提供すること。

2004 年度のテーマ

- 第 1 回 自分のことばを取り戻すー「考えていること」を表現する場を求めて
- 第 2 回 第三の言語教育をめざしてー 国語と日本語を結ぶ言語文化教育
- 第 3 回 添削と修正をめぐってー 第三の言語教育への方法論
- 第 4 回 言語教育における協働とは何か

* 各回 40 名ほどの参加があり、有益な議論が活発に取り交わされた。

* NPO 言語文化教育研究所, ** ケイ商店（非会員）

2-2 日本語学習者のクラス

A 日本語学習者のためのライティングサポートクラス (ポスター 4)

意味のある現実的なコミュニケーション体験を通じた日本語の表現力向上に向けて。

現在活動中である学習者 A さん

- 日本語学校で勉強をした経験はあるが、普段日本語を使用する機会があまりない。
- 「総合活動型日本語教育」の理念にもとづいたレポート執筆活動。
- レポート執筆活動と連動させ、教科書使用の試み。
- レポート執筆において必要と思われる文法事項の確認と、既習の文法事項の再整理を目的とし、自律的な学習環境を目指す。

今後の課題と展望

- 学習者の言いたいことを明確に表現できるような表現形式の「よりどころ」として教科書を使用。
- 初級前半の文法項目確認の段階ではこのふたつの活動が二分してしまう傾向にある。
- 教科書とレポート執筆活動をどのように連動させていけるかが今後の課題。
- 担当者は、学習者がことばを学ぶことの意味に自覚的になり、主体的な学びを得られる環境をいかに創出することができるかについてさらに考えなければならない。

B 日本語学習者のためのユビキタス講座：考えるための日本語 [ベルリン・プロジェクト] (ポスター 5)

期 間 : 2004 年 11 月 18 日～ 2005 年 3 月 3 日

担当者 : 1 名 (ベルリン)

学習者 : 7 名 (ベルリン)

メンター: 2 名 (日本・韓国在住各 1 名)

山田ボヒネック頼子氏 (ベルリン自由大学東アジア研究所日本学科準教授) の授業との共同プロジェクト。

- 従来の教室活動と、BBS 上の活動を統合したユビキタス・プロジェクト。
- 学習者は興味・関心のあるテーマについて、クラスメンバー・担当者による内容検討と BBS におけるメンター (日本・韓国) のサポートを受けながらレポートを執筆。
- GBKI では、BBS や担当者間の連絡用 ML の作成など、技術的なサポートも行った。

今後の課題と展望

- 学習者の「考えていること」の表現化は、さまざまな他者が関わることでより豊かな広がりを持ったものとなる。
- 本プロジェクトは、多様な他者とともに自己の表現を磨いていくことを実現するものであり、新たな教室活動の可能性を拓くものとする。
- 今回は、学習者・大学側の IT 環境の不整備、学習者の BBS に対する理解不足により、ユビキタス講座で最も重要な BBS 上のやり取りが活性化しなかった。
- 教室活動と BBS におけるメンターの支援が二分化するという問題も生じた。
- 両活動を車の両輪のように連動させ、より充実した表現活動をいかに構築していくかが今後の課題である。

2-3 日本語教師のクラス

A 日本語教師のための言語文化教育入門講座 (ポスター 4)

期 間 : (1) 2004 年 4 月～6 月 全 6 回 (2) 2004 年 6 月～8 月 全 6 回

実施日 : (1) 4/6 4/13 4/20 5/11 5/25(レポート提出) 6/8 (相互自己評価)

(2) 6/8 ((1)の相互自己評価見学) 6/22 6/29 7/6 7/20 7/28 8/17～24(メールでのレポート提出と相互自己評価)

(6/8の活動は(1)・(2)合同)

参加者 : (1) 3 名 (教師志望者 うち 2 名は日本語非母語話者)

(2) 4 名 (2 名現職教師, 2 名教師志望者)

(1 名を除き(1)・(2)のメンバーは異なる)

メンター : 2 名

目標

教室での実践からの疑問や迷いをもとに自分自身の問題意識を探り、どのような日本語教室を設計するのかを考え、それをまた自分自身の実践へと戻していく。

方法

「私にとって日本語教育とは何か」または「なぜ日本語教師を目指すのか」というテーマでレポートを書き、それに対して他者から意見をもらった上でもう一度レポートを書き直す。

スケジュール

レポート 1 提出 → 検討 → レポート 2 提出 → 検討 → レポート 3 提出 → 対話 → レポート 4 提出 (完成原稿) → 相互自己評価

今後の課題と展望

- 現職教師にとっては、毎日のこなすべき課題への日々の改善と、理想とするものが乖離してしまうというジレンマがある。
- 現場を持たない教師志望者の場合は、実現不可能な理想論になる傾向も否めない。
- 現場の問題を取り上げ、現場から離れずに理想や理論を組み立てそれを現場へと戻していくための、メンターの関わりが課題。
- 現場に直結した情報や方法論を取りこむことが必要か。
- メンター自身の日本語教育の現場での活動への取り組みの開示も求められる。

C 日本語教師のためのユビキタス講座言語文化教育入門 (ポスター 6)

期 間 : 2004 年 8 月 15 日～9 月 15 日

参加者 : 5 名 (2 名は海外から参加。現職教師 3 名, 現職国語教師 1 名, 教師志望者 1 名)

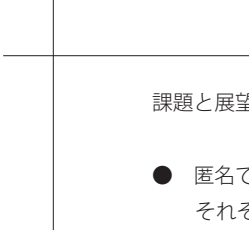
メンター : 2 名

目 標 : 「なぜ私は日本語教育に関わるのか」を問い、「今私にとって日本語教育とは何か」という (現時点での) 一人一人の答を出す。

方 法 : インターネット上の掲示板を使い、「なぜ日本語教育に関わるのか」(動機) と「私にとって日本語教育とは～である」(仮説) を書き込み、それに対してお互いの意見へのやり取り行ない、もらった意見を踏まえて自分の今の考えを書く。

スケジュール

- (1) 8/15～8/22 タイトルを決めて「動機・仮説」を書く。
- (2) 8/23～8/29 お互いの「動機・仮説」に対して意見を言う。
- (3) 8/30～9/5 もらった意見を踏まえて現時点での結論をだす。(完成レポート)
- (4) 9/6～9/12 お互いの完成レポートにコメントする。
- (5) 9/13～9/15 この活動への感想をまとめる。



課題と展望

- 匿名でおこなったため、参加者の顔が見えにくかった。お互いの問題意識を話し合う場合、それぞれの現場の背景なしには難しい。
- また NPO の場を参加者と共有し育んでいくためにも匿名ではなくお互いの顔が見えることが重要。
- 「書く」という行為のみで対話を行なっていく実践の特徴を分析し、マイナス面は補強しプラス面をより活性化していくことが求められる。
- この実践においても「理想と現実」という課題が残された。
- メンター自身の「理想と現実」への取り組みが求められる。単なる司会者ではない役割が強く求められていることを実感。

3. 課題と展望を踏まえた上での今後の実践

オンデマンド講座「言語文化教育研究入門」(ポスター 7)

日 程： 2005 年 6 月 6 日 (月) ～ 2005 年 7 月 16 日 (土)：オンデマンド授業
2005 年 7 月 23 日 (土)：スクーリング

- 「オンデマンド講義」と「インターネットの掲示板を利用した対話」を行き来する。
- 言語文化教育における最新のオンデマンド授業(細川英雄)を音声付スライドでインターネット配信。
- 言語文化教育の基礎概念を学び、感想を交わす中から、それぞれの教育観を構築していく。
- 講義・メンターによるサポート・参加者間のインターアクション、三者の融合。
- 活動の最後にスクーリングを行い、顔を合わせてそれぞれの「言語文化教育とは何か」を発表・議論する。